

令和4年度入学 編入学（推薦）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	斎藤 環	中高年ひきこもり	幻冬舎, 2020年, pp. 68-71より, 一部改変 「無断転載不可」	幻冬舎

令和4年度 編入学（推薦）

社会福祉学部
小 論 文 (120分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 50 点)

かつてアメリカ精神医学会では、ひきこもりのことを「Social Withdrawal」(ソーシャル・ウィズドローアル=社会的ひきこもり)と呼んでいました。しかし現在は日本語の「Hikikomori」がそのまま英語でも通用し、2010年にはオックスフォード英語辞典にも掲載されています。

それもあって、ひきこもりは日本独自の現象というイメージが強まったのですが、そんなことはありません。ほかの国でも、同様の問題は起きています。

日本以外でひきこもりがとくに多いのは、韓国とイタリア。韓国には約 30 万人のひきこもりがいると言われていて、人口比で考えると、割合は日本とあまり変わりません。イタリアでも、EU 加盟国で初めてひきこもりの家族会がつくられました。それぐらい深刻な問題になっているわけです。

では、日本、韓国、イタリアの共通点は何か。それは、成人した子が親と同居する率が高いことです。いずれの国も、30 歳までの成人した若者の親との同居率は 70%以上。成人してから家から出て独立せず、親に面倒をみてもらいながら暮らしてよいとする家族主義的文化があるのです。

当たり前のことですが、ひきこもりという現象は家族がいなければ起こりません。家族が原因だと言いたいわけではなく、面倒をみてくれる家族がいないとひきこもることはできないという意味です。

ですから、成人したら親は面倒をみず、自立して生きていくのが当たり前だと考える個人主義的な国では、ひきこもりは起こりにくい。たとえばイギリスやアメリカでは、ひきこもりがいいるとは言いませんが、少なくとも、まだ社会問題にはなっていません。

そう聞くと、「やはり日本も家族主義をやめて個人主義の社会になるべきだ」と言いたくなる人がいると思います。しかしイギリスやアメリカのような個人主義の国でも、社会参加ができずに苦しむ人がいないわけではありません。ところが親元では生活させてもらえず、収入がないので部屋を借りて一人暮らしをすることもできない。そのため彼らは、ひきこもりになることはできず、ホームレスになってしまいます。

したがって、家族主義から個人主義に切り替えればよいという単純な話ではありません。イギリスやアメリカはひきこもりが少ない代わりに若いホームレスが多く、日本や韓国はホームレスが比較的少ない代わりにひきこもりが多い。社会参加ができない若者はどの国にもたくさんいます。大きな視点から見れば、これは「社会的排除」であり「社会的孤立」です。彼らの生活形態は、つまるところ、ひきこもりかホームレスの二択しかないのです。社会参加ができない人たちがいること自体が問題の根本ですから、どちらがよいということはありません。

日本の親が子との同居をやめて無理やり外に追い出せば、ひきこもりはなくなるでしょう。しかしその代わりに、社会参加できない 200 万人以上もの人たちがホームレスになってしまうおそれがあります。「家から叩き出せ」と煽るのは簡単ですが、根本の問題は解決しません。やはり政策レベルでは、彼らの社会参加が容易になるよう支援しなければならないのです。

実際、これからは日本でも若いホームレスが増えるおそれがあるでしょう。成年年齢の引き下げや子ども・若者育成支援推進法の改正などによって、弱者化した若者を支える法律の方針が大きく変わ

ろうとしているからです。若いホームレスが増えれば、いままでがんばってひきこもりの子の面倒をみていた家族も、「成人したらもう面倒をみなくていい」と考えるようになるかもしれません。その結果、ひきこもりがホームレスにシフトしていく可能性があるのです。もちろん、そう遠くない将来、親が亡くなってしまおう中高年ひきこもりのホームレス化も考えておかなければなりません。

ホームレスはひきこもりと違って誰の目にも見えやすい問題なので、支援対策を打ち出しやすい面はあるでしょう。しかしその一方で、治安の悪化をはじめとする社会の不安定化を招くおそれはホームレスのほうが大きいと思います。やはり、どちらがよいという問題ではありません。

ともあれ、ひきこもりという現象は日本特有の文化とはほとんど関係がありません。なかには「甘えの文化」や「恥の文化」など日本的な文化とひきこもりを結びつけて解釈しようとする人もいますが、その関係性は仮にあったとしても些末なものです。それがいちばんの要因だとしたら、韓国やイタリアに多い事実を説明できません。ひきこもりを生む最大の社会的要因は家族主義と考えるべきです。

したがって、ひきこもりが多いからといって、日本人だけが「おかしい」わけではありません。ホームレスも含めて、社会から排除された人々、孤立した人々をどう支援するかは、世界共通の問題なのです。イギリスがいち早く「孤独問題担当国務大臣」を任命したように、日本もこの問題に思い切った政策を打ち出すべきではないでしょうか。

(斎藤環『中高年ひきこもり』, 幻冬舎, 2020年, pp.68-71より, 一部改変)

問 1 下線部「家族主義から個人主義に切り替えればいいという単純な話ではありません」と著者が述べている理由について、200字以上 250字以内でまとめなさい。

問 2 日本でのひきこもりの解決策について、本文の内容を踏まえて、あなたの考えを 600字以上 800字以内で述べなさい。